

「Clinical Radiology of the Liver」 (In two parts)

(Diagnostic Radiology Series, Volume 1)

edited by Hans Herlinger
Anders Lunderquist
Sidney Wallace

国立がんセンター放射線診断部
高 安 賢 二 山 田 達 哉

著名な3名の放射線専門医の編集による肝臓放射線学の専門書である。総勢33名の分担執筆であり、2巻35章、1148頁より構成されている。その内容は肝の解剖、生理、検査方法、臨床応用の4分野から成り、随所に豊富な実例が掲げられている。

肝の解剖(第1～4章): 腹部単純撮影に始まり、肝内脈管走行の解剖(肝動、静脈、門脈、胆管、それにリンパ管)、そしてCTスキャンと超音波(US)による肝区域が述べられている。

生理(第5～6章): 前半で肝のミクロレベルにおける生理、代謝が述べられ、後半で肝切除後みられる肝および隣接周辺臓器の変化が動脈造影を中心に記載されている。今後、肝切除例数の増加に伴って関心の持たれる分野になるであろう。

検査方法(第7～21章): 各種画

像診断法(US, CT, シンチグラム、血管造影、バリウム検査)の長所、短所が実例も豊富に事細かに説明されている。また本書の主眼の1つである門脈圧亢進症(門亢症)における各種門脈造影法(経脾・経動脈・経臍静脈・経頸静脈・経皮経肝門脈造影)および肝静脈、下大静脈造影法の手技、適応などが述べられている。臨床上来る側副血行路像も含めて多数の症例が載っており、後半で胆道造影法が述べられている。PTC, ERCP(有山が執筆)、胆道の内・外瘻術、胆道内視鏡が挙げられ、そのほか本邦ではまれな肝実質造影法と経頸静脈肝生検法が記されている。

臨床応用(第22～35章): 本邦では数少ないadenoma, focal nodular hyperplasia, hamartomaなどの特色ある画像とその鑑別が要領よく述べられている。反面、肝細胞癌の記

載がやや少ない感がある。

この章を通じて、近年新しい分野になってきた interventional radiology が力説されている。血管カテーテルを用いた悪性腫瘍、外傷、血管性病変、および門亢症に関連する消化管出血に対して embolization の有用性が述べられている。悪性腫瘍に対する infusion 療法や, panto-paque を用いた肝嚢胞の治療も載っている。更に門亢症と黄疸の臨床が、前巻と多少角度を変えて述べられており、そのほか先天性肝疾患、小児肝疾患、寄生虫症、肝移植と幅広く記載されている。今後の展望として NMR, Digital Subtraction Angiography, 新しい造影剤 EOE-13 などが挙げられている。

本書は、鮮明な写真(CTの項でやや不満であるが)が随所に所収しと載っており、また説明、本文共に平明な英語で表現されている。肝腫瘍、門亢症を勉強する人はもちろん、広く肝疾患の放射線学を理解しようとする人にとっても役立つ書である。各種画像診断法の出現と相まって、近年の interventional radiology の進歩は、従来の単なる診断から更に治療も加わり、幅広い高度な専門知識が要求されており、その意味からも、一読の価値ある書と思われる。

1,148 pp, 1983, ¥ 81,000
Marcel Dekker, Inc., New York

日本総代理店 医学書院洋書部